明治実業家列伝㉗

長尾 四郎右衛門

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野 正道

衰退する村

温泉や有名な史跡があるわけでもなく、大きな工場があるわけでもない山あいの集落というと、現代では過疎化が進行し、地域の活力が徐々に失われる典型的なパターンと言えるかもしれません。しかし、明治・大正時代はそうした地域も「豊かなむら」に成り得る可能性を持っていました。

仙台市太白区の南西部に位置する生出地区もそうした「豊かな山村」として全国的に知られた場所だったのです。明治時代後半にそこで行われたさまざまな取り組みは、「模範村」、と高く評価されたのです。

かつて名取郡生出村と呼ばれたその場所は、名取川の上流域にあり、明治二十一（一八八八）年時点で二四三戸、人口二二〇〇人という小さな村でした。山間部に位置しているため、耕地の面積は狭く、仙台へ供給する薪炭の生産や、村内を通る仙台と山形を結ぶ羽前街道（二口街道・笹谷街道）での物資輸送などが村人の貴重な収入源となっていたのです。

生出村の製糸工場　明治39（1906）年撮影　個人蔵

しかし、明治十五年に関山トンネルが完成すると、通過する物資の量や人の流れが大きく減少しました。村人の収入は減り、村の財政も収入減となって厳しい状況になるなど、生出は経済的に疲弊してしまったのです。

若き村長の取り組み

こうした閉塞状況を打破しようと立ち上がった人物がいました。生出村の村長・長尾四郎右衛門です。村内の旧家に生まれ、村の役場に勤務した四郎右衛門は、その仕事ぶりや人格を認められ、三〇歳にして戸長（明治二十二年に制度改正後は村長）に推されたのです。衰退しつつある村を再生させる切り札として、若い手腕に期待が寄せられたのです。

四郎右衛門が打ち出した施策は多岐にわたりました。倹約や貯蓄といった生活改善の指導、学校教育の振興、成人を対象とした社会教育の推進といったソフト面の政策と共に、産業振興や社会資本の充実といったハード面での取り組みが急速に進められたのです。

産業面で四郎右衛門が最も力を入れたのは、養蚕と製糸業でした。これに協力したのが仙台の豪商である佐々木重兵衛。四郎右衛門の志に共感した重兵衛は多額の資金を提供し、これによって村人は無利子で桑の苗を購入できるようになり、大規模に養蚕が始まったのです。その結果、明治十七年には僅か一石だった繭の生産は、明治末には五千八百石にまで増加したのです。

さらに四郎右衛門は、生糸の原料繭を産出するだけでなく、生糸そのものを生産した方が収益が大きいと考え、村営の製糸工場を建設しました。当時の生出村には事業を興せるだけの資産家がいなかったため、村が民間企業的な役割も果たしたのです。

養蚕・製糸と共に四郎右衛門は林業にも力を入れました。従来の薪炭生産だけでなく、将来的に材木を産出できるように植林を進めたのです。養蚕・製糸は短期的に大きな収入増をもたらしましたが、それにとどまらず、長期的な経済資源を村に備えようというのが、この植林事業の狙いだったのです。

模範村

長尾四郎右衛門の取り組みは、着実に成果を挙げ、村人たちもこれに協力し、村内の沈滞した空気は一掃されました。道路や橋梁の整備、役場や学校などの建設も進められ、その成果は県や国の機関にまで知れ渡るようになりました。

明治三十六年、国の内務省は市町村の取り組みの模範となるものとして、千葉県源村・静岡県稲取村と生出村を全国に紹介しました。さらには英文のパンフレットが作成され、三つの村は、日本の地方自治の優れた事例として外国にまで紹介されたのです。

明治四十三年九月、執務中に倒れた四郎右衛門は、五八歳でこの世を去りました。

「まちづくり」「地域おこし」が叫ばれる現在、四郎右衛門のような実業的感覚を備えたリーダーが求められているのかもしれません。

仙台市史

好評発売中

通史編6 近代1

明治時代の仙台　近代化とそのくらし

青葉区折立と太白区茂庭を結ぶ馬越石トンネルは、明治38年（1905）に建設された。現在、仙台市西部の重要路線となって大きく拡幅されたトンネルを、多くの自動車が行きかっている。
（写真左（個人蔵）：明治39年　写真右：平成19年）

◆A5判　520頁　オールカラー　◆定価3000円（本体2858円）

お求め先　県内主要書店・仙台市博物館／㈱宮城県教科書供給所　TEL.022-235-7181　FAX.022-235-7183

お問い合わせ先　仙台市博物館市史編さん室　〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地　TEL.022-225-3074